

第2章: イエス・キリストにある新しい命

本書では、これから2つの章にわたり、キリストにある新しい命に焦点を当てていきたいと思えます。第1章では、救いとは何か、どうすれば救いを受けられるのかを見てきました。具体的には、救いとは、イエス・キリストを信じる人すべてに与えられた永遠の命の約束により、もっとも明確に示されるものであることを学びました。さらに、永遠の命（永遠の命とは、事実、イエス様ご自身です）を受けることからの恩恵は、完全な自由と栄光、満ち溢れる力、安息、そして愛であることも続けて学びました。このように、イエス様がわたしたちに与えてくださった救いの宝物についてはすでに説明してきましたので、この本の残りの章では、このすばらしい救いについて、より詳しく見ていくことに努めたいと思えます。さて、わたしたちはイエス様を信じる時、聖霊によって洗礼を受け、イエス・キリストの体内に入り、そして新しく創造されたものになりました（コリント人への第一の手紙第12章13節、コリント人への第二の手紙第5章17節）。わたしたちは生まれ変わり、新しい人生を歩き始めたのです。では、この命はどのように現れ、どのように見えるのでしょうか？こうしてキリストのもとに生まれた新生児たちは、どのように育てられるべきなのでしょう？何を食べさせればよいのでしょうか？この章では、キリストを信じる人の幼少期についてお話したいと思えます。すべてはここから始まります。よい育て方をされた子供は、よい人間に育ち、そうでなければ、その子供は惨めなこととなることでしょう。

イエス・キリスト信者の誕生をお話するにあたって、まず、その新しい命はどのようにして生まれるのかをお話したいと思えます。まだイエス・キリストを救い主として信じていない方、イエス様を信じてはいなくても、自分の信仰は劣り、十分でないと感じている方、そのような方々の助けになることを、いくつかお伝えしたいと思えます。とても重要で、そしてこの章に関係してくることです。なぜなら、生まれ変わるために必要不可欠な要素は、イエス様への信仰、ただそれだけだからです。さて、まず命は、わたしたちがイエス様を信じたその瞬間から始まります。つまり、イエス様を信じた時、わたしたちが受胎した瞬間です。さらに、使徒パウロが「あなたがたは主キリスト・イエスを受け入れたように、彼にあって歩きなさい」のように語った時、わたしたちの全人生がキリストと共にあるようにルールが敷かれました（コロサイ人への手紙第2章6節）。わたしたちはイエス様をどのように受け入れたのでしょうか？答えは簡単です。イエス様を信じることによって、イエス様を受け入れました（ヨハネによる福音書第1章12節、ヨハネの手紙 第一の5章1節）。ですから、最初にお伝えしたいのは、つまずきや感情の乱れがあっても、それを絶対に、自分の不信心の口実にはしないでいただきたいということです。信じられなくなったときでも、とにかく信じ続けてさえいれば、イエス様はあるがままのあなたを、そのまま受け入れてくださいます。残念なことに多くの方が、「聖書を読み、祈り続けなさい。神があなたの心の中に現れ、信仰を与えてくださるよう祈るのです。わたしもまた、あなたのために祈ります。」というアドバイスを受けているようです。そして福音さえも、「祈り、待ち、信仰を受け入れる者は、永遠の命を受けるのです」と捻じ曲げられたものとなってしまっているようです。これは本当に残念なことです。しかし、コリント人への第二の手紙第6章2節の中に、こうあります。「神はこう言われる、『わたしは、恵みの時にあなたの願いを聞き入れ、救いの日にあなたを助けた。見よ、今は恵みの時、見よ、今は救いの日である』と。救いのときは今日なのです。祈り、待つ必要はありません。ただただ信じ、もし信じられなくても、信じるしかない

いのです。イエス様は、「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている」と言われました。もう言い訳や、待つのは止めましょう。「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救いの日である」のです。

さて、次にお伝えしたいことは、イエス様への信仰は、多くの場合、身勝手な行いだと見られがちだという点です。少なくとも、世間の目はそのように見ているようです。なぜなら、イエス様を信じることによって、わたしたちは実際、自分にある責めや責任、そして罪悪感を、自分ではないだれかに転嫁しているからです。この世では、わたしが自分の犯した悪事の責めを、ほかのだれかに負わせたなら、わたしは身勝手な人間と見られるだけでなく、臆病者とされることでしょう。ですが、この責任転嫁は、信仰を持った瞬間に、まさにわたしたちに起こることなのです。主への信仰の行動として、わたしたちは、「主イエスよ、これを全部受け取ってください。わたしは自分の罪と責任、そして義務をみなあなたに転嫁します」と言い、主は喜んで、「いいですよ」と言われるのです。その証しは十字架にあります。主はそれを喜んで背負っていただきました。そうして、すべてのものの主、指導者であられる方が、すべてのものしもべとなられたのです。わたしたちが奉仕するのではなく、主がわたしたちに奉仕していただきます。わたしたちが仕えるのではなく、主がわたしたちに仕えてくださっているのです。もしイエス様が、よい生徒にだけに永遠の命を与えるような教師であれば、わたしたちは「主よ、わたしはすべてのものを売り払い、貧しいものに与え、あなたの行くところにはどこへでもついてまいります」と声高に言うことでしょう。ですが、主を、自分の救い主として見るならば、わたしたちは「主よ、あなたはわたしのためには何でもしていただきます。わたしには、あなたについていく資格もありません」と嘆くことでしょう。ここでお伝えしたようとしている点、それは、わたしたちがイエス様を救い主として信じたとき、わたしたちは実際、本当に身勝手に振舞うことになるということです。そして、それが身勝手だとしても、主を信じるために、わたしたちはそうでなければならないのです。このことをしっかりと心に留めておきましょう。救い主を信じる時、それがわたしたちに起こることだと。人間の自尊心はそれを拒みますが、それはそれでいいのです。「イエス様、わたしはあなたを信じます！あなたはわたしの救い主です！」。

イエス様は、「隣人を、自身同様に愛しなさい」と教えてくれるでしょう。ですが、隣人を愛する前に、わたしたちはすべきことがあります。それは、自分自身を愛するということです。救いのとき、自分の魂への救いが優先され、隣人が求める助けのすべては、その次となるのです。ですから、たとえ本当に多くの人々が助けを必要としているとしても、また、自分の責任は自分で負うのがごく当然なことだとしても、すべて忘れましょう。ほかの人のことはすべて忘れるのです。—「主イエスよ！わたしをお助けください！わたしをお救いください！」

イエス様を信じ、そして主を受け入れるとき、イエス様がわたしたちに仕え、奉仕し、わたしたちの足を洗っていただきます。これが主の喜びであり、地上に来られた理由なのです。「というのは、人の子も、仕えてもらうためではなく、むしろ仕え、自分の命を多くの人々の身代金として与えるために来たからだ」(マルコによる福音書第10章45節)。ここが、わたしたちのとどまるべきところであり、住むところなのです。救い主イエス・キリストを信じることに多くの身勝手さがあったとしても、これがわたしたちの救いの道、主の御心なのです。

もう一度繰り返しますが(わたしは繰り返してばかりしていますが)、私たちは主キリスト・イエスを

受け入れたように、彼にあって歩かなければなりません（コロサイ人への手紙第2章6節）。このような教えは、キリストにある生活を生きるためのルールを敷いてくれました。わたしたちは信仰によって主を受け入れました。信仰の強さ、大きさは関係ありません。なぜなら一番重要なのは、幼子のような信頼の心をもって、イエス様を全身全霊で信じることだからです。つまり、その信仰の度合いにかかわらず、両手を高く投げ出し、ただ次のように言うだけで、主イエス様への信仰の行動となるのです。「わたしはここにいます。わたしはあなたが必要です。でもあなたに献げられるものは何ともありません。わたしにはしっかりした信心もないし、悔い改めることもできません。わたしはあなたに対する約束も、解決も持っていません。ですがわたしをわたしとして受け入れてください。わたしは自分の全存在をあなたに献げ、命をあなたのお手元にゆだねます。わたしはあなたを過去も現在も、そして将来にも信頼します。わたしはあなたを信じます。」イエス様を受け入れたとき、わたしたちにはイエス様へ献げられる価値のあるものは、何ともありませんでした。それどころか、わたしたちの全存在自体に、何の価値もなかったのです。しかし、神がそのような価値のない人間との和解のため、御子を送ってくださったというよき知らせを、わたしたちはただ信じました。神は死んだ者をもよみがえらせ、取るに足りない者に価値を与えてくださるのです。

ではここで、イエス・キリストにある新しい命とはどのようなものなのかを見てみましょう。キリストにあっての新生児とは、今、イエス・キリストの栄光に、目を覚ましたばかりの人のことです。救い主を見て、自分たちには主が必要だと気づきました。そして、「イエスを信ずるものはだれも、朽ち果てることなく永遠の命を持つ」という福音書のよき知らせを受け取り、信じたのです。イエス様は約束を果たし、自分たちの信頼と希望はそこにあるのだと信じているのです。その信仰は純粹で、喜びは簡潔です。そして、自分の魂に、希望と、苦痛の和らぎを見つけ、その顔は太陽のように輝き、その両眼は星のようにきらめいています。生まれ変わったその姿を見て、周りの人は、「これが同じ人間だろうか？」と驚嘆することでしょう。そのキリストにあっての新生児たちは、救い主を心から愛しています。イエス様はこの人々の息であり、イエス様と面と向かって会える目を心の底から待ち望んでいるのです。

しかしながら、新生児が弱く繊細なのと同様に、この人々もまた、もろい存在です。さまざまな教えの風に吹きまわされたり、もてあそばれたりする（エペソ人への手紙第4章14節）とあるように、少しの風にも吹き飛ばされてしまうかもしれません。この赤子の中には、疑惑や、偽の教師のたばかりの的になり、また虚偽の光の使いに誘惑されるかもしれません（コリント人への第二の手紙第11章13節から15節）。ですが、どのようなことがあったとしても、イエス様を信じてさえいれば、この小さな者たちは決して滅びることはありません。

この小さな者たちのもう一つの特徴は、父なる神から非常に愛されているという点です。その存在は、地上のすべての国々より尊いのです。地上の生きとし生けるものすべてが消滅し、幽霊になるほうが、これらの赤子の一人が滅びるより楽なほどなのです（マタイによる福音書第18章14節）。小さな者たちを蔑まないように気をつけましょう。なぜなら彼らのためのみ使いたちは、天におられるわたしの父のみ顔を、天でいつも見えています（マタイによる福音書第18章10節）。小さな者たちは、イエス・キリストにとって最も大切な存在で、その思いのすべてを尽くされています。そして教会のリーダー、長老、牧師、教師は、主に小さな者たちのため存在します。イエス様は、これらの赤子の一人に害悪が及ぶのを見るよりは、地上のすべてのものが地獄に落ちるのを見たいとすら思われるのです（マタイによる福音書第18章6節）。

小さな者たちとは、イエス様にとって、このうえなく可愛く、目に入れても痛くないほどの存在です。何にもまして愛されています。そして全知全能の神の刀は、これらの人々をさげすみ、虐待し、軽んじ、冷たくあしらう者たちの上に振り落とされるのです。

さて、この世では、赤子は育って少年少女となり、やがて成人します。イエス・キリストを信じる者たちも同様です。ですが、聖書から学ぶように、そうでない場合も多く見られます（ヘブル人への手紙第5章12節から14節、コリント人への第一の手紙第3章1節から2節、エペソ人への手紙第4章14節）。中には赤子のクリスチャンとして長い年月を過ごし、結局、全く成長しない人もいます。この世の赤子が、きちんとした世話や子育てなしでは強く育つことができないように、クリスチャンの赤子もまた、適切な監督や教育なしでは成長できません。教会とは、礼拝、賛美、そして王の中の王に感謝を献げる場所だけではありません。聖書の学び、祈り、小グループの集まり、地元での奉仕活動と福音主義、貧者への奉仕、世界的な宣教への支援、社会活動などの数多くの活動もあります。しかし、その中でも教会が最優先すべきことは、キリストの赤子たち、つまり若者や弱い人々への世話や気遣いなのです。

このようなことを書き並べてきましたが、それは、自分がどれほど大きな愛で包まれているのかということを確認してもらいたいからなのです。イエス様を信じている皆さん、皆さんの生活がどのようなものか、またどのように感じ、またほかの人からどのように思われているかは関係ありません。あなたの魂、それが神にとって、世界そのものよりも価値のあるものなのです。ここから先、本書を通して、どうすればイエス・キリストにとどまり続けられるのかという点を示していきたいと思っています。

では続けて、本章の冒頭部分で触れた、二つの質問に答えていきましょう。キリストのもとに生まれた新生児たちは、何を食べさせ、どのように育てられるべきなのでしょう？

簡単に言えば、これらの赤子は救い主、主なるイエス・キリスト自身のことを食べさせなければなりません。当然のことのようですが、残念なことに、多くの新生児たちは餓死寸前なのです。

お伝えしたいことをできる限り明確にするために、たとえを用いてご説明します。人はそれぞれ異なる経験をしていることは承知しています。ですから、これからご紹介する例は、多くの方には当てはまらないかもしれません。この仮説の話の中にある、特定の状況や経験に注目することは避け、ただ問題の核心にあるものに焦点をあてて行きたいと思います。このストーリーの登場人物である男性の抱える問題は、実際、多くの方が抱える問題と同じではないでしょうか。

ある若者が自分の人生にむなしさを感じ、人生の真の意味を探すことで、そのむなしさを埋めようとしていました。どこをどう歩いたのか、気がつくや教会でイエス様とその十字架についての説教を聞いていました。そこでイエス様を信じ、罪への赦しと新しい命が約束されました。すべてがすばらしい出来事でした。しかし、そこで何か起きたのです。若者は、ほかのクリスチャンたちが、ただ救い主を思い、空想に身を任せて時を過ごすだけでなく、イエス様のための奉仕へ生活を献げていることに気づきました。そして、まずは教会での聖書の学びから始め、そして、「主に従って歩むことを望むのなら」、水の洗礼を受けるべきだと教えられたのです。その若い信者は、聖書の学びと洗礼は、教会へ入るための一種の入会式のようなもののように感じました。最終的に何週間かの学びの後、洗礼の日を迎え、正式に教会の一員となりました。キリストとの新しい生活を始め、すべてがすばらしい状態に思えました。教会には毎週出席し、献金もし、小グループの会合にも参加しました。ほかのクリスチャンとの交わりも楽しみました。

ですが間もなく、この若者の心にはまた、むなしさが戻ってきたのです。自分の憂鬱や不満足はどこから来るものなのかと混乱し、やがてそれは自分の罪のせいではないかと考えるようになりました。罪からの完全な自由を見出すことができないのです。さらに若者は、自分の人生に対する主の御心は、何なのかと悩みました。自分に幸福をもたらすものが何かも分からなかったのです。彼は友人に相談し、本を読み、牧師にも1、2度話してみました。そして、この世には罪から完全に自由になる道はない、主を待つことだと励まされたのです。「祈り続け、辛抱強くしていなさい。聖書をさらによく読み、あなたの命のために、主のご意志を捜し求めなさい」と言われたのです。何週間も迷子になったように感じたあと、クリスチャンとしての自分の人生の目的について、何らかの啓示を「受け取り」ました。クリスチャンは「すべての国に行き、そこに弟子を作ることだ」と学んだのです。キリスト関連のことに、より深く集中するように決心を固め、悔い改めも新たにし、地元での伝道活動に励みました。そしてそこで若者は、安心感と心の平和を感じました。それは、すべてをゼロからはじめるのと同じことのように感じました。そうして、数ヶ月が過ぎました…。

このたとえ話の若者は、結局また降り出しへ戻り、浮き沈みの堂々巡りに陥りました。実際、彼に自由は見つけられないでしょう。もし彼がこの物語の終わりに自由を見つけたなら、それはだまされたことになり、さらに何かを失うことにもなるでしょう。この話の中で、若者は主の御心を求め、約束し、悔い改めを新たにし、伝道活動の中に人生の目的を追い求めました。このようなことをすべて行った上で、彼はついに心の和らぎと平和を感じました。確かに、これは、すべてをゼロから始めるようなものでしょう。ですが、この若者は非常に深く、自分自身を欺いています。なぜわたしはこんなことを言うのでしょうか？それは、この若者がイエス様そのものである「自分の初恋を失った」からです。本来、どのような始まったのでしょうか？若者は、ただ福音を信じ、それを信じることに喜びを得ました。このときだれを信じていたのでしょうか？イエス様を信じ、イエス様はするといったことには忠実であること、つまり若者の罪を赦し、自由と永遠の命を与えてくださると信じていたのです。イエス様への信仰を通して、若者は喜びと平和、そして心の和らぎを持っていたのです。自然の聖に満ち、その顔は輝いていました。ですが、「イエス様」から、「クリスチャンがやるべきこと」へと移ったとき、彼は救い主から去ってしまったのです。彼は信じたのですが、彼は誘惑の下で妥協しました（ルカによる福音書第8章13節）。彼の誘惑は、聖書の勉強と洗礼を薦められた瞬間に始まりました。わたしは聖書の勉強や洗礼そのものが悪いといっているわけではありません。それはいずれもよいものです。ですが、そのような活動は適度にこなさなければ、致命的なものになってしまうのです。この若者は、イエス様の愛をより深く知るよう奨励されるべきでした。救い主の上に安らぎ、救い主を楽しむようにと教えられるべきでしたが、そうはならなかったのです。そのような奨励の代わりに、多くの教会にある操作手順へと進んでしまいました。つまり、人々にイエス様を信じる決心をさせ、それからその人々をほかのことで忙しくさせる、その手順で救い主のことをまったく忘れさせてしまうのです。その人々にとって、最初はイエス様が疑いなく全面的に完全な救い主でした。ですが、知らないうちに救い主であるイエス様より、教師であるイエス様を中心し始めてしまいました。結果として若者はだまされ、自分の救い主から歩み去ってしまいました。

この話の若者は、イエス様に「とどまる」べきだったのです。イエス様の中に命が始まり、イエス様によって命は続きます。イエスは言いました。「わたしのうちにとどまりなさい。わたしもあなた方のうち

にとどまっている。枝がブドウの木のうちにとどまっていなければ、自分では実を生み出すことができないように、あなた方もわたしのうちにとどまっていなければ、実を生み出すことはできない。」(ヨハネによる福音書第 15 章 4 節) イエス様にとどまるとは、主を信じるという意味です。イエス様を信じるすべての人々は、愛という実を生み、靈魂の贈り物を自然に楽しみます。ですが、イエス様はまた、「わたしのうちにとどまらないなら、その者は枝のように投げ出されて枯らされる。そして人々はそれらを集め、火の中に投げ込み、それらは燃やされる」と警告もしています(ヨハネによる福音書第 15 章 6 節)。イエス様にとどまることは、この上なく大切なことなのです。イエス様を信じた後、ほかの人または別のことを重視したり、追い求めて行ったならば、イエス様にとどまったことにはなりません。その結果多くの人々は目的を失い、憂鬱に陥り、気持ちが動揺してしまうのです。そして、罪の念にはまり、病いを患ったようになります。この若者のように、しおれてしまうのです。真の平和は、イエス様を信じることによって見い出されます。信仰とは、わたしたちがクリスチャンとして始まり、そしてとどまる場所なのです。

多くの場合、教会活動や「クリスチャンとしてすべきこと」は、わたしたちの注意を、ただ一つだけ必要なイエス・キリストそのものから、そらせてしまいます(ルカによる福音書第 10 章 38 節から 42 節)。それだけではなく、イエス様にあつての赤子たちには、この世のしがらみが、四方八方から圧力となってその双肩にのしかかっています。突然教会に来るのをやめる人もいれば、教会から教会へと渡り歩く人も出てきます。喜びを失う人もいれば、活動と情熱に突き動かされて数年を過ごし、それでも依然として、自分たちがだまされていることに気づかない人もいます。このような若者たちは、引き続き、*その救いの瞬間に受け入れたイエス様によって、はぐくまれないと断言するのです。救いの瞬間には、教会活動や世間的な圧力など関係のないものでした。関係あったのは、ただ、魂を救ってくださった主、そのお方だけだったのです。信じる者はその生涯をかけ、救いの瞬間に生きなければなりません。その救いの瞬間は、自分と救い主だけのものでした。そしてその中で生きるとき、イエス様と出会い、そして自然と実を結ぶのです。もし、キリストの赤子たちが誘惑を退けず、救い主からの強引な引き離しへ拒否しなければ、その人生を失敗と罪の中に生きることになってしまいます。毎日、迷いの中に行き、形だけの宗教や、その他のことの中で、だまされ生きようになるでしょう。

最後に、キリストの赤子はどのように育てられるべきかという点を見ていきたいと思います。簡単な答えはこうです。救い主であるイエス・キリストが心の中に定まって、ゆるぎないものとなるよう、さらに、さらによく知るよう育てられるべきなのです。イエス様は、「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている」と言われました。永遠の命を持つならば、欠けるものなどはなく、求めるものもないはずで、すでに述べたように、永遠の命とは、イエス・キリストです(ヨハネの第一の手紙第 5 章 20 節)。そして、イエス様とイエス様を送られた父を知ることによって、わたしたちは永遠の命を生きるのです(ヨハネによる福音書第 17 章 3 節)。さらに天なる父が御子をこの世に送られたのは、この世をとがめるためではなく、救うためでした。ですから、小さな者たちは、イエス様はモーセのように重い首かせをつける教師であると教えられるべきではありません。救い主イエスの首かせは軽く、その戒めは痛ましいものではないと教えられながら、育つべきなのです(ヨハネによる福音書第 3 章 17 節、マタイによる福音書第 11 章 28 節から 30 節、ヨハネの第一の手紙第 5 章 3 節)。洗礼の水から出てきたその瞬間から、教会での活動に参加するようになると多くの人が直接的、間接的に奨励されます。このような奨

励は悪意からではないにせよ、それは間違いなのです。その間違いの理由は、そのような活動がクリスチャンであることの実態だと、多くの人が信じるようになるからです。するとクリスチャン生活が何かをしたり、特定の生き方をすることがすべてとなってしまうのです。そして、キリスト教がほかの宗教と何ら変わらないものへと、なり下がってしまうでしょう。しかし、キリスト教とはイエス・キリストがすべてです。イエス・キリストが始まりであり終わり、アルファでありオメガなのです。これを知った上で、小さな者たちへ救いと命とは、ただキリストへの信仰のみによって得られるものだと言いつつ、告白の言葉が出るや否や、活動やそのほかのことに駆り立てるのは、まったく意味のないことなのです。わたしたちは、小さな者たちが救い主の中で完全に定まり、その無償の愛と救いを知るよう、助けることに専念すべきなのです。そうすることによって、神への果実は自然に実を結ぶことでしょう。わたしがここで述べていることについて、賛成されない方が大勢いらっしゃることを知っています。ですが、長年教会へ通いながらも、福音や福音の意味するところをご存知ない方が、たくさんいらっしゃることも、残念ながら事実なのです。そのような方の人生は、宗教儀式や「善い行いをする事」へと変わってしまっています。そして、自分は神に喜んでいただいていると考えているようです。しかし神は、愛によって働くイエス・キリストへの信仰だけにお喜びになるのです。この愛は、神の御子に対する知識と、その救いの力を心の中に育て、自分自身の魂が回復し、いやされることから始まります。キリストの赤子はまず、ほかの人に仕える前に、仕えてもらわなければなりません。イエス様の愛をはっきりと口にできるようになる前に、その愛に定められなければならない、また、人に安息を与えられるようになる前に、まず自ら、その安息の方法を学ばなければならないのです。

*多くの方々が、ご自分の救いの「瞬間」について覚えていらっしゃらないようですが、それでいいのです。イエス様は、「わたしを信じる者は永遠の命を持っている」と言われています。ですから、救い主を信じているのなら、ご自分の救いのその瞬間を覚えていようといまいと、あなたは救われているのです。